

## 本当のやさしさ

会津若松ザベリオ学園中学校 1年 川本 眞子

「妹、かわいいね、どこの幼稚園に通っているの？」

そんなことを言われたら実は小学生です。なんていえるわけがない。さらに、三本の指を立てて、

「さん。」

といているのを見たら、もはや訂正する意味さえないのでは？とも思ってしまう。

ある時、勇気を出してこう尝试してみた。

「いいえ、小学二年生です。」

そうしたら、

「あら、そうなの。大変ね。」

と不自然に優しい笑顔で言われた。何が大変だと思ってそう言っただのらるか？確かに妹は成長もゆっくりで、不器用ではある。まだきちんと文章もいえないし、何を言っているか聞き取るだけで精一杯。そんな妹でも私はいやだとは言わなかった。

妹が産まれた時、母は私にこういった。

「これからどんな大変なことがあるかもわからないけど、少しずつ受け入れていこう。」

そうして、だんだん妹のいる生活が当たり前になってきた。大変でもなんでもない。

なのに、なぜ私はいろいろな人にかわいそうといわれてしまうのか。ずっと前までそう思っていた。

そんな私の認識を変える出来事があったのはある日、妹と二人で近所のスーパーへお使いに行った時のこと。」妹が、すねて床に寝転んで泣いてしまった。何とか立たせようとしていたら、知らない女の子に

「何やってんの？赤ちゃんがかわいそう。」

と言われた。小学生の妹を赤ちゃんといわれ、ショックだった。しかし何よりも悲しかったのは、そのことを見ていた女の子のお母さんが、目をそむけて去って行ってしまったことだった。

その時私は理解した。あー、あの人はだから「大変ね」なんていつてきたの

か。私はこれからも妹にしばられ続けながら生きなきゃいけないのだろうか？その時初めて、妹のことを恨んだ。私が今まで妹のことを大変だと感じなかったのは、すべてお母さんが私に言わなかったただけだった。そして、どこで覚えてきたかわからない「ばか？」と妹に言われたとき、こんなにも迷惑をかけている人に言う言葉か？そう思ってしまった。どう接すればいいかわからなくなった私は、妹を避けるようになった。話かけられてもてきとうにあしらったり、だから私は気づかなかった。妹が平仮名を読めるようになったことを。

どんなに冷たくされても、妹は私への笑顔を絶やさなかった。自分が一生懸命覚えた沢山の平仮名カードを、一枚一枚丁寧に、時々つかえながら私に読んでくれた時、思わず涙がこぼれた。それを見た彼女はハンカチを私に渡してくれた。そして、妹への差別を嫌がっていた私自身が一番差別をしてきたんだと私は気付いた。

今まで私は、妹はすべてにおいて何もわかっていないと思っていた。例えば、自分が馬鹿にされていることや、人を思いやる気持ちなど。

しかし、それは間違いだった。妹は、思いやりの気持ちにあふれていて、母によれば、馬鹿にされていることもきちんとわかっていて、時折涙を流すこともあったという。

妹は、心を持った一人の人間。妹のせいでどんなに迷惑がかかっているとしても、自分だって誰かの力を借りなければ生きてはいけない。そんなことを知っているのに、私はなぜ長い間妹から目をそらし続けてきたのだろうか？

妹が産まれてきて、悪いことばかりでもないかもしれない。本来ならかわることのなかったかもしれない人達と仲良くなれたり、妹のかみの毛を私が好きなように結んであげたりできるのは、全て妹のおかげだ。

私の妹は個性的。できれば普通の人に産まれてきてほしかった。そう思ったことだって数えきれないほどある。だけどよく考えれば、いいことだったとたくさんあった。

妹は、どこに行っても白い目で見られてきた。それを見た人の過度な気づきも、私はいやだった。

そうやって、私は多くの時間、妹から目をそらし続けてきた。しかし今は違う。今度からは、妹のほうにきちんと心を向けたい。

明日、妹と二人で近所のスーパーに買い物に行こうと思う。どんなに変な目で見られても、私は気にしない。妹は泣いている人にハンカチをそっと差し出してくれるようなやさしい心を持っている人だと、私はわかっているから。